

2000年有珠山噴火と火山防災教育

— 専門家との顔の見える関係構築の取組を通して —

田鍋敏也（火山防災エキスパート 壮瞥町教育委員会 教育長）
※2000年噴火時 壮瞥町企画調整課長（非常災害現地対策本部常駐）

1 はじめに

有珠火山は洞爺カルデラ形成後、その南壁に約2万年前に生成された新しい火山で、7、8千年前に山体崩壊があり、南麓から噴火湾にかけて無数の流れ山を残した。

1663年に噴火を再開した後は、2000年までに9回の噴火歴がある。20世紀は4回噴火している。有珠山噴火の再来や自然災害に備え、死傷者がなかった2000年有珠山噴火の教訓を継承する取組を各地域で生かしてほしいと念じつつ紹介する。

2 緊急対応に役立った平時の取組

2000年の噴火で人的な被害は全くなかった背景には、有珠山の麓に北海道大学有珠火山観測所があり研究者が常駐していたことと、自然環境や火山防災に造詣の深い地域リーダー三松正夫記念館長三松三朗氏の存在がある。

1983年から「子ども郷土史講座（壮瞥町教委主催）」や、「昭和新山・有珠山登山会」等、活火山の懐（フィールド）に出かけ、自然の恵みと一時期の災害について有識者からコメントをもらい「地域の災害環境を学ぶ」社会教育事業を継続してきた。1995年には昭和新山生成50周年記念国際火山ワークショップ（火山会議）を開催し、同時期に火山防災マップを発刊し全戸配布した。

有珠山周辺では、このような事業を通して有珠山に関する情報の共有が図られ、専門家と行政、住民間での信頼関係が構築されていたため事前避難の行動がとられたのである。

3 2000年有珠山噴火と対応

2000年3月31日、有珠山は西山西麓から噴火をはじめ、翌4月1日には、北西山麓でも火口群を形成した。活動は、3月27日の火山性地震開始当初から、気象庁、北海道大学有珠火山観測所がキャッチし、地元の行政機関へ情報が伝達され、28日には各市町の災害対策本部が設置された。

29日、11時10分の緊急火山情報を受けて、3市町は専門家の助言を得ながら避難勧告を発令、避難誘導、避難所の開設を行うなど迅速な対応を行った。火山活動に関する専門家の適切な説明、情報提供により、噴火前には1万人余りの事前避難が完了し、一人の死傷者も出さずに済んだ。

4 洞爺湖有珠山ジオパークの取組

有珠山周辺では、2000年対応の教訓と、火山と共生してきた歴史・文化を次世代に伝承し、経済の活性化につなげる「洞爺湖有珠山ジオパーク」が推進されている。テーマは「変動する大地との共生」で2009年8月に糸魚川（新潟）・島原半島（長崎）とともに国内第一号の世界認定を受けた。

ジオパークの推進母体「洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会」は、首長、学識者、国、北海道の関係機関などから構成されており、有珠火山防災会議協議会のコアメンバーと重なっている。ジオパークの推進がリスクコミュニケーション（人間関係）の構築を助長する効果をもたらしている。

5 火山、ジオパークを通じた防災教育の必要性

火山は地球の息吹、体温を体感できる場所であり、ひとときの自然災害、多くの恵み（温泉、大地、景観）等、地球と人類の営みを学ぶ素材として最適である。

2008年に改訂された新学習指導要領（小学校は2011年、中学校は2012年から完全実施）には、自然災害や火山噴火の学習が明記されているが、東日本大震災後、さらに学校教育における危機管理と防災教育の充実が求められている。

「地球（火山）と人間の関わり」について、住民、行政と専門家が連携する「ジオパーク」への認識が高まり、ジオパークを活用した火山と共生する地域づくり（減災人づくり）が全国各地で推進されることを期待したい。